資格・立場の表示史

――「たり」「として」とその分化――

山口　堯二

〔抄　録〕

古代語で人物の資格や立場を表す傾向がめだつものに、断定の助動詞「たり」、その連用形「と」による「とあり」「として」がある。「として」は近現代語にも継承されるが、「たり」の衰退に伴い、より語源寄りに、格助詞「と」や補助動詞化したサ変動詞連用形などの連語と見られるようになり、古代語における以上にその用途を広げている。近世には「と」と補助動詞「あり〈ある」の連語を連体成分の主要素とする「ともあらうものが」という形で、資格や立場にふさわしくない事態についての自省や批判を表す言い方も現れる。同じころ、「として」に通じる点のある「としたことが」という言い方も現れ、自他の予期に反する不用意な言動についての心外感や違和感を表すのに用いられるようになった。本稿ではそれらの各表示法とその通時的な相互関係を探り、資格や立場の表示法が時代とともにその近隣関係を変化させながら分化していく姿を辿る。

キーワード　「たり」、「として」、「ともあらうものが」、「としたことが」、資格

はじめに

古代語では、人物の資格や立場を表す傾向のめだつ語に、断定の助動詞「たり」がある。その原形に当たる「とあり」もそれと共存していた。「たり」の連用形「と」による「として」の形にも人物の資格や立場を表す用法がめだつ。しかし、近現代語では断定の助動詞「たり」は衰退し、「として」の「と」は、もとの格助詞「と」と見るべき品詞性を回復する。それに伴い、古代語の「として」では接続助詞

と見られる「して」も、より語源寄りに補助動詞化したサ変動詞の連用形と接続助詞「て」の連語と見られることになる。近現代語の「として」は、その見方の変化にも関連して古代語における以上にその用途を広げたようである。

近世には、「と」と補助動詞「あり>ある」の連語を連体成分の主要素とする「ともあらうものが」という言い方も現れ、資格や立場にふさわしくない事態についての自省や批判に用いられる言い方になる。同じころ、「として」に通じる点のある「とした」を連体成分とする「としたことが」という言い方も、自他の思いがけない言動についての心外感や違和感を表すのに用いられるようになっている。

本稿は、それらの各表示法とその通時的な相互関係を探り、資格や立場の表示法が時代とともにその近隣関係を変化させながら、分化していく姿を辿ってみるものである。

一、断定の助動詞「たり」の役割

古代語の断定の助動詞には、「なり」と「たり」があった。平安時代、「なり」は和文体・漢文訓読体を問わず広く用いられたが、「たり」は漢文訓読体を中心に用いられ、使用される文体に顕著な偏りがあった。[1] 中世になると、和文体と漢文訓読体は互いに寄り合って和漢混交体を形成し、その後の文体の主流になっていく。また、文章語は古い体系の保持に価値を認めて、たえず変化する口語から離れて文語化も進む。その後の文語文では、多くの場合「たり」と「なり」は意味的な差を中心に使い分けられたと見てよかろう。[2]

「たり」の意味的な特徴を探るには、その上接語の広がりがまずよい物差しになるだろう。古代語では資格や立場を表す「と」も「たり」の連用形と見なされたが、「と」には、外形上、格助詞と紛らわしい場合もある。そこで、連用形の「と」による「とあり」や「として」については後に譲り、それ以外の「たり」の用例を観察すると、断定の助動詞「たり」の上接語には、次に示すように名詞の中でも人物の身分・親族関係などの社会的な資格や立場を表す語が多いことに気づく。

(1)舎利弗和上タリ。（今昔・一・十七）

・古へ清盛公いまだ安芸守たりし時、伊勢の海より熊野へまいられけるに、（覚一本平家・一・鱸）

・東寺ノ長者、醍醐ノ座主ニ補セラレテ、四種三密ノ棟梁タリ。（太平記・二）

・武名にも不」恥、忠義之心もなかりし事、武士たる上、絶二言語一事也。（太閤記・十四）

次のように、上接語自体は人物を表す語でないものもあるが、その場合もその連体修飾語を含めて、人物や人事に関連する社会性の認められる物件に集中する傾向が見られる。

(2)それ三井寺は、近江の義大領が私の寺たりしを、天武天皇によせ奉りて御願となす。（覚一本平家・四・三井寺炎上）

・干将莫耶の剣と被」云て、代々の天子の宝たりしが、（土井本太平記・十三）

・此大坂の城と申すは、……たやすく落つまじき名城たるうへ、外

側に堀を掘り、（仮名草子・大坂物語・上）

人物の社会的な資格や立場を表す名詞に付く例には、次のように主語と同じ語に「たり」を付けてその述語にしたり、被修飾語と同じ語を連体修飾語にしたりする言い方も稀ではない。この点も「たり」の意味的な特徴を考えるには注意すべきであろう。

(3)神ノ神タルハ人ノ礼ニ依テ也。人ノ人タルハ神ノ加護ニ任タリ。（源平盛衰記・四・山王垂跡）

・父父たらずと云共、子もッて子たらずンば有べからず。（覚一本平家・二・烽火之沙汰）

・人に人たる人と人たらぬ人と候故に、人たる人を人と申し候。（仮名草子・清水物語・上）

・それ、君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり、夫夫たり、婦婦たるは、人倫の常なる也。（折たく柴の記・下）

たんにその人物の社会的な資格や立場をさすだけなら、このように同じ語を反復する言い方は通常現れない。そういう言い方が可能なのは、その上接名詞に述語や連体修飾語という成分の働きを与える「たり」が、たんにその上接語の概念に包摂されることを意味するだけでなく、その資格や立場、ないし、それにふさしい実態に焦点を当てることができるからであろう。

それに比べると、断定の助動詞「なり」の表示性は概念同士の関係にとってより説明的である。「なり」の原形「にあり」にも同語を反復した次のような例があるけれども、それに伴う打消には、そのすべてがそうである意味の全称性や無条件性を否定する論理性のほうがめだつ。「父父たらず」などの言い方とは違うのである。

(4)家、々にあらず。次ぐをもて家とす。人、々にあらず。知るをもて人とす。（風姿花伝・七）

断定の助動詞「たり」には、助動詞「べし」を下接させた「たるべし」の形で、その資格や立場にふさしいふるまいを要請する意味の表現も早くから多い。それも「たり」が人物の資格や立場に通じる実態に焦点を当てて表せる傾向に応じた現象であろう。

(5)これは大明神の御使也。汝この剱をもッて一天四海をしづめ、朝家の御まぼりたるべし。（覚一本平家・三・大塔建立）

・寄合の酒は、むらさどのやくたるべし。奈良の御祭の見参酒は、同じくをさどのゝやくたるべし。（申楽談儀）

・けふよりして我師たるべし。（仮名草子・伊曽保物語・中・二）

・嶋津又太郎事、嶋津兵庫頭被二属一与力一上は、軍役已下兵庫頭次第たるべき事なるに、内心は一向不二許容一之由候。（太閤記・十四）

ところで、断定の助動詞「たり」の使用が、漢文訓読体の文章に偏っていた平安時代、和文体の文章では、資格や立場を表す場合にも、次のように「なり」が用いられた。その「なり」の用法における資格や立場の表示性は軽く、より文脈依存的であろう。後の「母じや人」などの言い方はその後身にあたるが、近世には一語化する傾向があって、その点でも資格や立場の表示性は軽いと思われる。

(6)あねなるひと、「……飼はむ」とあるに、（更級日記）

・是申し母じや人。（浄瑠璃・堀川波鼓・上）

室町期以降、口語では「たり」の現れ方も限られるようになる。「（一日）たりとも」などの熟した言い方を除けば、その活用形は連体形「たる」に限られ、成分的にも、「親たる人」「男たるべきもの」のような連体成分に偏り、助動詞としては形骸化してくる。

(7)我より下の者に崇敬せられうよりも、上たる人〈camitaru fito〉に諫めらるる事を喜うで交りをなせ。（天草版エソポ・四三八頁）

・人たる者の娘は、まだしき時より、はや縁付の沙汰もするに、（浮世草子・好色二代男・七・二）

・人たるもの、いかにしてあの姿のにくかるべきや。（ひとりね・下）

・しかし苟も長官たる者に向つて抵抗を試みるなぞといふなア、馬鹿の骨頂だ。（二葉亭四迷・浮雲・一・一）

(8)男子たるべきものがそんな意気地がない魂ではいかんぞ。（三遊亭円朝・牡丹燈籠・七）

・「生徒たるべきものが、何で他の邸内へ侵入するのですか」（夏目漱石・我輩は猫である・八）

例(8)の「べし」を伴う言い方は、「たるべきものが」の形で用いられ、その人物にふさわしくない言動を批判する傾向がある点、後述する「ともあらうものが」に似ている。

「たり」に本来あった他の活用形や、成分的な広がりが失われてくれば、連体成分における「たる」が助動詞「たり」の連体形だという見方も共時的なものではなく語源解釈的になる。近現代語におけるこれらの「たる」は、積極的な助動詞性をすでに失い、共時的にはむしろ上接語を語幹とする連体詞の語尾に近くなったと見てよいであろう。[3]

二、「とあり」と「ともあらうものが」

古代語では断定の助動詞「たり」の連用形と見られる「と」と補助動詞「あり」の連語「とあり」も、資格や立場を表すことが多い。その資格や立場を表す例には、次のようなものがある。「と」と「あり」の間に係助詞の介入する例もあるので、併せて示す。

(9)なかなかに人とあらずは酒壺になりにてしかも酒にしみなむ（万葉・三・三四三）

・わくらばに人とはあるを　人並みにあれもなれるを（万葉・五・八九二）

・後ノ世ニ鉄輪王トナリテ、一天下ニ王トアラム。（三宝絵・下）

・此ノ人は前生ニ貧シキ家ニ生レテ、下賤ノ人ト有リキ。（今昔・二・二十二）

近代語の「あり」の基本形は「ある」に変わるので、「とあり」の通時態は「とあり＞とある」の形で示すが、近現代語には「とあり＞とある」だけで資格や立場を表す例は見当たらない。次にあげる例は、資格や立場を表すようにも見えるものであるが、「御上使のよしで」というほどの意で、伝聞内容などの表示に慣用された「あり＞ある」の代理的用法の例[4]とも見うる。前者の見方に、ほかにも類例があればよいが、それが見当たらないので、当面、これも伝聞内容を表示した言い方の例と見るのが無難である。

(10)これは〳〵、御上使とあつて石堂殿御苦労千万。（浄瑠璃・仮名

手本忠臣蔵・四）

断定の助動詞「たり」は近代語では衰退した。その連体形「たる」による「親たる人」などの連体法や「男たるべきもの」のような連体成分としての言い方は、なお形骸化しながら維持されたこと先述の通りであるが、近世にはそれらに当たるより口語的な言い方として、「ともあらうものが」という言い方が現れる。この言い方は人物の社会的立場などを表す普通名詞のほか、固有名詞や人称代名詞もその上接語になり、もっぱらその人物にふさわしくない事態を取り上げる場合に用いられている。

それには、例(11)のように否定語や反語と共起し、その人物にふさわしくない言動を当然のこととして否定するものと、例(12)のようにその人物にふさわしくない現実について自省や批判の気持を表すものとがある。「ともあらうものが」の「が」を連体助詞「の」に換え、連体成分に変形された例もあるが、併せて示す。

(11)「ハテそなたに縫ふてたもれといふ事ではなひ。人の女房ともあらふものがなんの自身物縫やらふにや。そりや聞様がわるひ」（浮世草子・世間娘気質・二・1）

・仮りにも大本営ともあらうものが騙すはずはないでせう。（大佛次郎・帰郷・朝）

・今となつては、おろおろするばかりが産婦の兄貴ともあらうものの務めではない。（井伏鱒二・本日休診）

・社長ともあろうものが、駅員風情の前に這いつくばってあやまるなんてことはできない。（筒井康隆・改札口）

(12)ちよと行てくる。由良之助共有ふ侍が、大事の刀を忘れて置いた。（浄瑠璃・仮名手本忠臣蔵・七）

・「…首縊りの力学の演者、理学士水島寒月君ともあらうものが、売れ残りの旗本の様な出で立をするのはちと体面に関する訳だから」（夏目漱石・吾輩は猫である・三）

・番頭どんともあらうものが、いやはや又当て事も無え事を云つたものだ。（芥川龍之介・鼠小僧次郎吉）

・「小山内先生ともあらう者が」と批難する人もあつたけれども、（谷崎潤一郎・青春物語）

・わたしともあろうものが、すこし出おくれたわい。（井上ひさし・ブンとフン・四）

例(12)の第一例は他の例の「もの」に当たる所が「侍」になっているが、筆者の気づいたところでは唯一の例である。「もの」の連体成分は、いずれも「とある」の連語に係助詞「も」が介入し、それに推量の助動詞「う」が下接した、「ともあらう」の形で用いられている。

近世という時期の推量の助動詞には、ムード形式化が進んでいて、推量の助動詞の使用はムードを担いやすい文末の述語の位置にすでに偏っている。[5] このような連体成分には原則として用いられなくなっているから、この「ともあらう」の「う」は、被修飾語の形式名詞「もの」とともに上接語の資格や立場をそれなりに一般論化するものであり、それによってその述語として続く事態との不相応な論理関係を観念的にめだたせる言い方と見てよかろう。近現代語に残存した「たり」の連体形「たる」に、例(8)のように「（男子）たるべきものが」

式に助動詞「べし」や形式名詞「もの」が用いられ、ふさわしくない事態と共起する傾向が認められたのも、この「ともあらうものが」と方向としてよく似ている。ともに不相応な関係が強調されている意味で、その「が」は、対立的な句をつなぐ接続助詞「のに」にも置換しやすいものになっている。

三、「として」とその周辺

「として」については言及すべきことが多い。最初に資格や立場を表す基本的用法の通時的変化を取り上げ、次にその周辺の用法に触れる。そのあと、近代語の資格や立場を表す「として」に、不相応な事態との共起がめだってくる傾向に言及し、それを繋ぎとして、「としたことが」という言い方を取り上げることにする。

三の一　基本的用法とその通時的変化

資格や立場を表す「として」は、次にその一斑を示すように古代語からあり、古代語と近現代語との間で形式の見方は変わるが、その意味と形は現代語まで継承されている。[6]

(13) 我は臣として助けまつらくのみ。（仁徳紀・即位前紀・訓）

・ワヅカニ小国ノ王子トシテ来テ、タヘナル法ヲヒロメテ、（三宝絵・中）

・これ、身として思ひ寄らず候。（とはずがたり・二）

・幸に細君が女として持つて生れた好奇心の為めに、此厄運を免れたのは、（夏目漱石・吾輩は猫である・六）

(14) 人倫の身として、いかでか御情けを忘れたてまつるべき。（とはずがたり・四）

・人として是にまよはぬはなきはづを、（浮世草子・けいせい色三味線・江戸・五）

・小まんが願ひ請負故、出籠仰せ付けられた。宿中として、きつと取立て納めませいと、則ち小まんをお預ケじや。（浄瑠璃・丹波与作待夜の小室節・中）

・余は学生として、誠実に研究すべきことを研究せんとするものなれば、（北村透谷・明治文学管見）

古代語では漢文訓読体に用いられたもので、例(13)の第一・二例はそれである。近代語でも漢文訓読体、または、それ寄りの固い文体にはその傾向が続くから、中世以降は、概して和文性の強そうな資料を中心にその例を求めた。そうして得られたものには反語・推定・命令・意志などの、志向性にすぐれる表現がめだつので、それを例(14)とした。中近世という時期においては、漢文訓読体やそれ寄りの固い文体を除いて、資格や立場を表す「として」の用途は、例(14)に示すような志向性にすぐれる表現に偏る傾向もうかがえるのである。なお、これらはその資格や立場にふさわしい事態と共起している。「として」にはその資格や立場に対して不相応な事態を後続句とする例もあり、その現れ方にも時代差がめだつが、それについては後に譲る。

資格や立場を表す「として」の「して」は、古代語では接続助詞と見られる。形容詞・形容動詞や打消の助動詞「ず」の連用形などに下接する接続助詞に、古代語では、「て」と「して」があり、「して」は

「知らずして悔しく妹を別れ来にけり」（万葉・十五・三五九四）、「若クシテ文ノ道ニ遊テ」（三宝絵・序）、「風荷の老葉は蕭条として緑なり」（和漢朗詠集・上）、「家豊ニシテ万ヅ楽シクテ」（今昔・二十九・五）などと用いられた。平安時代には漢文訓読体の文章に偏るのである。この接続助詞「して」は、サ変動詞の連用形「し」が補助動詞「あり」にも代用できる、自動詞寄りの意味で補助動詞化し、接続助詞としてより基本的な「て」と一体化して、接続の働きを担うに至った、接続助詞のいわば肥大形である。資格や立場を表す「として」の「と」を断定の助動詞「たり」の連用形と見る見方は、その下の「して」が接続助詞と見られる見方と支え合っているのである。

古代語のサ変動詞には、「ここにして〈此間為而〉家やもいづち」（万葉・三・二八七）のように、「あり」と互換性のめだつものもあったが、「として」の形の連語には、その上接語を客語として、格助詞「と」と共起する、次のような言い方も古くからある。

(15)太子小野妹子ヲ使トシテ、サキノ身ニモロコシノ衡山ニアリテタモテリシ経ヲトリニツカハス。（三宝絵・中）

資格や立場を表す「として」の「し」は、すでに「あり」に類する自動詞寄りの意味から補助動詞化し、古代語では接続助詞の一部になっているが、それはこの例のような客語を主語に変換して、その結果に重点を置くようになった言い方と理解できよう。(7)

「たり」の連用形と見られる「と」には、次のように出生や出現を表す動詞と共起していて、容易に資格や立場を表す「として」と置換できそうな例もまじる。

(16)最後ノ身ニ婆羅門ノ子ト生レタリ。（今昔・二・二十）

・衣通姫の神とあらはれ給へる玉津島の明神、（覚一本平家・十・横笛）

このような「と」から見れば、資格や立場を表す「として」は、接続助詞「して」を添えて後続句との関係がより明示化するだけ、多様な動詞による後続句と相関しやすくなったものと見ることができる。

助動詞「たり」の使用が漢文訓読体の文章に偏っていた平安時代、和文体の文章では資格や立場を表す場合にも、「なり」の連用形「に」に接続助詞「て」を付けた、「にて」の形が用いられていた。

(17)昔、男、伊勢の斎宮に内の御つかひにてまゐれりければ、（伊勢・七十一）

・女にて、などかめでざらん。鏡を見てもなどかおごらざらむと、（源氏・夕霧）

しかし、「たり」と「なり」の違いに照らしても、この「にて」による言い方には、資格や立場の表示法として「として」ほどの明示性はなく、文脈に依存する控えめな言い方だったと思われる。(8)

近世までの資格や立場を表す「として」は、中世以降の和漢混交体を中心とする文章においても、先述のようにその用途が限られていたが、明治期ごろからは、その用途の偏りもなくなり、まさに資格や立場を表す代表的な言い方になっている。その頃から連体成分をつくる場合にも、「として」に連体助詞「の」を付けた「としての」という言い方が用いられるようになっている。断定の助動詞「たり」の連体形「たる」は、先述のように比較的後まで残存したが、「としての」

にはその「たる」に取って替わる一面がある。

(18)保守家としての敬宇先生は、少くとも思想界の一偉人なり。（北村透谷・明治文学管見）

・人間としての自分の言動に、みぢんも自信を持てず、（太宰治・人間失格・第一の手記）

・論旨は明快で、論文としての構成も堅牢といえるであろう。（司馬遼太郎・殉死・要塞）

三の二　資格・立場の周辺用法

「として」という形を中心に見て、資格や立場を表す用法の周辺には、微妙に異なるその他の用法も認められる。それには通時的変化の乏しいものもあれば、近現代語にめだってくるものもある。次にその順に概括的に言及していく。

まず古代語以来、「として」には「一つ」「一人」などの最小数詞や普通名詞をその上接語として後に否定の語を伴い、全称否定表現をつくるものがある。そのうち、二重否定と共起する場合は、その意味が強調的な全称肯定に相当することになる。普通名詞に付くものにはそれがめだつ。

(19)万、即ち箭を発つ。一つとして中らざること無し。（崇峻紀・即位前紀・訓）

・寺トシテオコナハヌナク、人トシテキヨマハラヌナケレバ、（三宝絵・下・一）

・事トシテ此算ノ術ニ離レタル事无シ。（今昔・二十四・二十二）

・食物にきらひなければ、物として不喰といふことなし。（談義本・田舎荘子・中）

・群集は、ひとりとして彼の到着に気がつかない。（太宰治・走れメロス）

「として」の形は形容動詞の活用語尾にも連続しているので、それに近い副詞や副詞を兼ねる名詞、数詞などに下接する用法もある。

(20)心念々に動きて、時として安からず。（方丈記）

・是を某一人としてたぶるもいかゞでござる程に、（虎明本狂言・口真似）

しかし、近代語に入ってめだつ周辺の用法もむしろ多い。近代語では「たり」が衰退するので、「として」の「と」も格助詞、ないし、格助詞寄りに見るしかなくなり、その変化が「して」にも、サ変動詞の連用形「し」、ないし、その変化した補助動詞に接続助詞「て」の付いた連語と見る見方を要求することになる。その新しい見方のもとに、「し」に許容される働きの広がりが、古代語における以上に多様な用法を可能にしたようである。

近現代語に周辺の用法としてめだってくるのは、名目、傾向、観点などを表す「として」の例である。「名目」はやや広く「意味」と言い換えてもよい。例(21)が名目、例(22)が傾向、例(23)が観点を、それぞれ表すと見うる用法の例である。

(21)御太刀代として黄金弐百枚、（信長公記・十一）

・せがれ伴左衛門葛城を請け出す手付けとして、金子五百両懐中せり。（浄瑠璃・けいせい反魂香・中）

・それは成るべく自分が社会に尽した仕事の報酬として受け度いと自分は思ふ。（田山花袋・田舎教師・二十六）
・その罰として閉ぢ込められた八卦炉をも打破つて飛出すや、（中島敦・悟浄歎異）

(22)坂東武者の習として、かたきを目にかけ、河をへだつるいくさに、淵瀬きらふ様やある。（覚一本平家・四・橋合戦）
・寝られぬよはのくせとして、夢さへ薄くなりにけり。（御伽草子・さいき）
・曲終れば、音を売るものゝ常として必ず笑み、（国木田独歩・女難・三）
・月が――夜更けになつて登る月の慣はしとして、赤くよごれたいびつな月が光つてゐました。（井伏鱒二・屋根の上のサワン）

(23)胸を騒がす折からに勘十郎がこゑとして、蚊帳の内をみなんだ、捜して見よといふ声す。（浄瑠璃・五十年忌歌念仏・中）
・鳥雅の方の下女病気にて宿へ下りしとあるを、物怪の倖として二十日ほど以前より此別荘へつかはしおきたるなり。（人情本・春告鳥・初・三）
・とても事実として考へられないことだつた。（太宰治・斜陽・五）
・女中という位置のせいだろう。ひとごととして一歩さがったところから気楽に見ていられるのだし、（幸田文・流れる）

傾向を表す例は後続句の具体的な事態の解説になっている。観点を表す例の「として」では、その「し」に対象を識別したり認識したりする働きがうかがえそうである。現代語では「見る」「考える」などの認識動詞と共起する例も現れ、そう見たり考えたりする見方や考え方を示す言い方もめだつようになっている。

なお、資格・立場・観点などを表す用法の「として」には、明治期以降、係助詞「は」の付く言い方もめだつようになる。固有名詞や人称代名詞に付けて個人的な立場を示す例も多くなっている。「は」で提示する言い方には、その観点を特定することによって後続句との関係を条件関係化し、それによって後続句の判断を相対化する効果もあるだろう。現代語には、その特定した見方を係助詞「も」で合説する「としても」の形も拾えるので、併せて示す。

(24)金にしては何ほどにもならないが、創作としては、よしんば望んでゐた脚本が出来たとしても、その脚本よりかずツと傑作だらうといふ確信が出た。（岩野泡鳴・耽溺・二六）
・僕としては――僕の行動としては関係がはつきりしたのちにとるべき行動と、同様のものを今もとるより仕方ありません。（志賀直哉・暗夜行路・二・八）
・乃木希典は軍事技術者としてほとんど無能にちかかったとはいえ、詩人としては第一級の才能にめぐまれていた。（司馬遼太郎・殉死・要塞）
・自分の作りだした小説の中の人物に面と向かって口答えされたのは、フン先生としてはじめてのことである。（井上ひさし・ブンとフン・一）

(25)然るに、秀吉は当代の風雲児です。戦略家としても、政治家とし

ても、外交家としても、信長公なき後は天下の唯一人者で、（坂口安吾・二流の人・一・一）

・写実としても、空想としても、この程度のものなら、あり振れた型の如きもので、（正宗白鳥・戦災者の悲しみ）

すでに述べた名目や傾向を表す例には、なお資格や立場を表す用法に通じる社会性の認められるものもあるが、観点を表す例には、むしろ話し手の主観がめだつ。資格や立場の周辺の用法としては、それだけ極限的と言えるかもしれない。

三の三　不相応な事態との共起の増加

近現代語の資格や立場を表す「として」は、先の例(13)(14)のように、それにふさわしい事態と共起するだけではなく、不相応な事態と共起することも多くなる。

その不相応な事態と共起する言い方には、後続句が打消の助動詞を伴うものと、もっぱら意味的に不相応であるものとがある。そのうち、打消の助動詞を伴う例には、次のようなものがあるが、その現れ方は散発的であり、特に時代的な偏りもめだたない。

(26)兄トシテ不教ズシテ不知顔ヲ作テ任セテ見給フハ、極メテ悪キ事也。（今昔・十・十五）

・武士（もの）の子として、しれたる親の敵（かたき）をうたずして、今空敷（むなしく）なり給はゞ、（浮世草子・武道伝来記・四・一）

このような例の場合、「として」自体はふさわしい事態と共起していて、打消の助動詞がその全体を否定していると見ることもできよう。その意味で特に注意を要するものではない。

次に、もっぱら意味的に不相応な事態と共起する例は中世ごろから散見するが、近世には多くなって、資格や立場を表す「として」は、それに集中する傾向さえめだつように見受けられる。次にその一斑を示そう。

(27)下として上をしのぐがゆへに、身をほろぼし畢んぬ。（古活字本平治・下）

・其上臣トシテ君ヲ流シ奉ル積悪、豈果シテ其身ヲ滅サヾランヤ。（太平記・六）

・臣として主君を弑し侍りし事古今多く侍りしか共、（太閤記・三・6）

・女の身として、我が子の腹切る介錯し給ひける事、（仮名草子・大坂物語・下）

・家老の身として傾城狂ひをして、国の仕置が成か。（歌舞伎・けいせい浅間嶽・上）

・ましてや、色里の情けを商売に、なさるる御身として、外のおもはくおぼしめすは、前方なる穿鑿。（浮世草子・けいせい色三味線・江戸・四）

・凡そ人の臣として、父其君を弑し、人の婦として、父其夫を殺すのごときは、人倫の変最大なるものにして、（折たく柴の記・下）

例(14)について述べたように、資格や立場にふさわしい事態を後続句とする場合にも、近世までの例には、志向性にすぐれる表現に用例の

偏る傾向があった。通常の叙述文における例が、近世を中心に不相応な事態との共起に偏る例(27)の傾向も、その時期の「として」にまつわる同様の強い表示性が要求した偏りと解せるだろう。

不相応な事態と共起する表現は、その資格や立場との関係で否定的な評価を含みがちである。このころ以降の例には、次のように否定的な評価を表す語自体と共起することもある。それもその延長線上に位置するものであろう。

(28)高が百両ありなしの身として推参千万。(浮世草子・けいせい伝授紙子・二・一)

・これしきの女の言ふ事を、明瞭に批評しえないのは、男児として不甲斐ないことだと、(夏目漱石・三四郎・五)

三の四　「としたことが」の出現

近世を中心に不相応な事態との共起に集中する傾向を生じる「として」に似て、近世後期には「としたことが」という言い方も出現する。その上接語は普通名詞のほか、固有の人名や人称代名詞を含めて人称語か、それを連体成分とする語に限られており、自他の不用意な言動やそれに対する否定的評価を表すなど、もっぱら不相応な事態と共起して、心外感や違和感を表す傾向がある。固有の人名や人称代名詞も上接語になる傾向は、例(11)(12)の「ともあらうものが」や例(24)の観点などを示す「としては」とも共通するものである。

次に、その上接の人称語が話し手をさす場合と、話し手にとって他者の場合とを区別して、その例の一斑を示す。

(29)コリヤ爰でいふ事じやない。夫に逢ふてからいふ事。わしとした事が、はしたない。(歌舞伎・伊賀越乗掛合羽・七ツ目)

・ほんにわつちとした事が、言ふ事ばかり言つて。(洒落本・傾城買二筋道)

・わしとした事が心の付カぬ。(浄瑠璃・絵本太功記・同十日の段)

・ヲヽ笑止、私(わた)しが風俗(なり)とした事が、貴夕さんおゆるし遊ばせへと(洒落本・南遊記・三)

・ホンニマア私とした事が、歳がひもなく泣たとて(人情本・春色梅児誉美・四・二十一)

・わたくしとしたことが斯様にひとすぢに、自分の失くなるまでに考へ続けてゐるのは一たい誰のせゐなのであらう。(室生犀星・かげろふの日記遺文・二)

・勇の前でも平気で服を着換える。母親におこられると、あら、あたしとしたことが、とおどけた顔でいって恥かしがるそぶりを見せるが、(高橋三千綱・九月の空)

(30)是は、娘とした事が。嫁入り早々いんでたまる物かいの。(浄瑠璃・伊賀越道中双六・五)

・あのまアきり山さんとした事が。いろ〳〵の事をいつて、気を引なんす。(洒落本・契情買虎之巻)

・おりんどのとした事が。アノマア間違ひばつかりいふて(噺本・小倉百首類題話)

・この子とした事が、賢こいようでも玩是なう。(歌舞伎・与話情

浮名横櫛・四幕目）

・花魁としたことが、私共へ其の御遠慮には及びませぬ。（歌舞伎

・三人吉三廓初買・四）

このような「としたことが」は、どこから出た言い方であろうか。その上接語の表す人物は、話し手である場合も多く、それを含めて話し手のよく知る身近な人物に限られている。いずれもその人物の不用意な言動に気づいた、心外感や違和感を主とする詠嘆性をそなえているだろう。その不用意な言動には、多かれ少なかれその人物にとって予期に反する不相応さも認められるから、すでに見てきた近世の「として」が不相応な事態との共起傾向を強めていたのと、その形や意味においてかなりよく似る点がある。その相似性において、「としたことが」の「とした」には、資格や立場を表す「として」に通じる側面がうかがえるだろう。資格や立場を表す「として」は連用的であり、この言い方を除けば、連体的な「とした」への変形は認められない。しかし、それと形態的に連続する、隣接領域である形容動詞や副詞の語尾には、古くから「むつとして」と「むつとした」などのように、連用・連体の互換性をもつものが多い。新しい言い方を形成する必要を生じた場合、そういう隣接領域への類推から、その互換性を利用することは容易なはずである。

しかし、「としたことが」の「とした」は、その意味上、たんに「として」の連体成分化だけには終わっていない。なぜなら、その「した」は、それに続く形式名詞「こと」とともに、一方では「としたことが」の上接語に当たる人物をその主語と見込む言動を表しているようだからである。資格や立場を表す「として」が、直接「としたこと」になることはないにもかかわらず、その意を含み得たのも、「としたこと」の「した」が「したこと」の形で、その人物の眼前の不用意な言動を表す、その働きとの両義性を担えたからであろう。

敷衍すれば、「としたことが」は、その上接語に当たる人物の不用意な言動に対して、ふだんはそうでもない人物が、予期に反してこんな言動をするとは、いやはや、というほどの、心外感や違和感を表す詠嘆的な中止表現と言える。そのうち、「このような言動をする」と言い換えた、述語に示されるはずの言動は一般には表示されず、そうする余裕のないところに生まれる詠嘆表現と見てよいから、説明上、その言動の様子があとに続くことはあるにせよ、詠嘆性の強い言い方として、「としたことが」で一旦中止する傾向が強いものである。「まあ」「あら」などの感動詞が先行することがあるのも、その詠嘆性の故である。

おわりに

最後に本稿の要点をまとめる。古代語で「なり」と併存した断定の助動詞「たり」には、人物の資格や立場を表す傾向がめだつ。古代語ではその連用形と見られた「と」による「として」の形を除いて、「たり」の衰退する近現代語では連体形「たる」だけが「武士たるもの」などの連体成分として残存し、共時的には連体詞の語尾に近くなる。「たり」の原形に当たる「とあり〉とある」には、近世になってそれを連体成分に用いた「ともあらうものが」という言い方が現れ、

その人物にふさわしくない言動を当然のこととして否定したり、そのふさわしくない現実への自省や批判の気持を表したりするのに用いられようになった。

資格や立場を表す「として」は古代語では「たり」の一類であり、平安時代には漢文訓読体に偏って用いられたが、中世以降、衰退する「たり」の一類という見方を離れて、資格や立場を強調する場合を中心に、次第にその用途を広げたようである。近世ごろからは、資格や立場の周辺の用法として、名目、傾向、観点などを表すことも多くなる。また、資格や立場を表す「として」には、不相応な事態と共起する用法が多くなった。近世後期には「としたことが」という言い方も現れ、ふだんはそうでもない人物の予期に反する不用意な言動に対して、詠嘆的に心外感や違和感を表すのに用いられるようになった。その言い方には近世ごろの「として」が不相応な事態に多用される環境の中で、それから分化した面を見ることができる。

〔注〕

(1)断定の助動詞「たり」については、春日和男「指定辞「たり」雑考――特にその発生と用法と――」(「文学研究」〈九州大学〉五七、昭和三三年三月)に、タリ活用形容動詞の活用語尾も含め、その用例・用法の出現傾向について、種々の言及がなされている。

(2)名詞や代名詞を上接語とするものに対象を限定する本稿の立場からは、やや抽象的に過ぎる感があるけれども、その点については、山田孝雄『日本文法論』に、いわゆる形容動詞の語尾も含めた広がりにおける、次のような指摘がある。

「なり」と「たり」との意義上の差をいへば「なり」は内面的にして主として断定をあらはし、「たり」は外貌的にして主として状態をあらはせり。(三五六頁)

(3)連体詞の概念については、森重敏『日本文法通論』(一九五九〈昭和三四〉年、風間書房)に、その語幹・語尾のありようを含めて、通説よりもはるかに広義にそれを利用した論がある。

(4)山口堯二「対比的な複文の前句における「あり」の朧化用法」、『構文史論考』(二〇〇〇〈平成十二〉年、和泉書院)第九章二。

(5)山口堯二「推量体系の史的変容」(「国語学」一六五)、『助動詞史を探る』(二〇〇三〈平成十五〉年、和泉書院)第二章。

(6)『現代語の助詞・助動詞―用法と実例―』(一九五一〈昭和二六〉年、秀英出版)には、「〔〜として〕(立場・資格・名目などの指定。)」として、「われわれとして最も注目せねばならぬのは、〜」などの例があげられている。

(7)森重敏『日本文法通論』(一九五九〈昭和三四〉年、風間書房)第三章第三節(二七八頁)に、「〜を〜とする」式の言い方との関係を含めて、その周辺に及ぶ氏の文法論的な見方が示されている。

(8)山口堯二「中古語「て」連用句とその周辺」(『国語論究7　中古語の研究』一九九八〈平成一〇〉年、明治書院)、『構文史論考』(二〇〇〇〈平成一二〉年、和泉書院)第三章五。

(やまぐち　ぎょうじ　人文学科)

二〇〇四年十月十五日受理